

戦争と記憶

「荻窪の記憶」は、地域に宿る記憶を掘り起こし、後世に伝えていこうという取り組みですが、世界中、どの町や村にも、そこに暮らす人々の記憶が宿っています。

ロシアが侵攻したウクライナも例外ではありません。テレビは連日、ロシア軍の無差別攻撃で瓦礫と化していく街を映し出していますが、爆撃で失われるのは形あるものだけではありません。そこに宿る無数の記憶もまた失われていくのです。以下、かけがえのない記憶とそれを奪う戦争をめぐって考えたところを記してみました。

「目から消えるものは、心からも消える」とは、原爆ドームの保存運動を突き動かした少女の言葉です。原爆の記憶を風化させないためには目に見える廃墟のドームが必要だと訴えたわけですが、祖国の歴史を後世に伝えるために戦争で破壊され



連日、テレビに流れるロシア軍の砲撃を受けた建物

た中世の町並をまるごと蘇らせた都市もあります。戦禍のウクライナから多くの難民を受け入れているポーランドの首都ワルシャワです。第二次大戦中、ワルシャワはナチス・ドイツによる徹底的な破壊によって、市の85パーセントが瓦礫と化しました。しかし、中世に遡る歴史をもつ旧市街は、戦後わずか3年で「壁のひび一本まで忠実」に復元されました。それを可能にしたのは、ワルシャワ工科大学建築科の教師と学生が密かに破壊前の建物を描き、隠していた3万5000枚もの図面とスケッチ、そして、「失われたものの復興は未来への責任である」と、瓦礫の山から使えるレンガを拾い集めた市民たちでした。

「歴史的建造物を残さないと、我々は記憶喪失になる」とは建築家・安藤忠雄氏の言葉ですが、ウクライナの首都キーウ（キエフ）は、ウクライナ、ロシア、ベラルーシに共通するルーツの地で、歴史的な町並みや建築に恵まれた古都です。その象徴が、市の中心にある聖ソフィア大聖堂と修道院。世界遺産に登録されていますが、だからといって、ロシア軍が砲を向けないという保証はありません。

ところで、この二カ月間、瓦礫と化する都市の映像を見ながら、筆者が感じていたのは強い既視感でした。それらの映像が、20世紀の二つの大戦をはじめ、旧ユーゴやシリアの内戦で破壊された都市の映像と瓜二つだったからです。

なぜ、人間は同じ愚行を繰り返すのか。都市を破壊し、かけがえのない人命と記憶を奪う戦争。何よりも望まれるのは一日も早いその終結です。

「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男